



甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS



ヒメツノカナブン (改称) の再発見

黒澤良彦

1986年9月3日、新潟県の馬場金太郎博士のお伴をして、台湾高雄県六龜郷の陳文龍氏の案内で、私は台東県関山鎮から南部横貫公路(旧関山越え)に陳氏の知人の運転するタクシーを乗り入れた。同夜は途中の碧山温泉に泊り、翌4日の10時頃に、峡谷の両側から今にも崩れ落ちんばかりに迫る垂直に切り立った断崖に膽を冷しながら、やっと峡谷上の狭い平坦面にある利稲(Litao)の集落にたどりついた。ここで一服ということになり車を降りてはみたものの、あたりは乾燥したグランドや草地ばかり、シーズンは過ぎており何もいない。やっと峡谷に面する崖端になにか咲いているのを見付け、近寄ってみると、数本のカラスザンショウに花が咲き、なんやらハナムグリらしいものが沢山飛び交っている。急いで車にもどって網を持ち出し、届く範囲の花を掬ってみると、どうやら来ているのは大部分がツノカナブンで、そこに少数のタイワンシロテンハナムグリ *Prataetia formosana* (Moser, 1910) が混っているらしい。カナブンの仲間がハナムグリと同じように花に来る、これは私にとっては大発見

である。車にもどり嬉々として殺虫管2本に収めた獲物を眺めているうちに、管の中のツノカナブンが、私たちが以前から見馴れている、いわゆる「ツノカナブン *Trigonophorus varians* Bourgoïn, 1914」とはどうも感じが違うことに気付いた。全部そろいもそろって小ぶりで頭楯端の突起が小さい。しかし、車中ではそれ以上詳しく見ることも出来ず、獲物を詳しく眺めることの出来たのは、その夜の宿泊地、花蓮県卓溪郷紅葉温泉に到着してからであった。

利稲でカラスザンショウの花から得たコガネムシはツノカナブン11♂♂24♀♀、タイワンシロテンハナムグリ3♂♂1♀、カバイロハナムグリ *Protaetia culta* Waterhouse, 1879 1♂であった。ツノカナブンは♀の数が多く、発生の後期であることを示していたが、他に花がなかったとはいえ、その数の多さはこの種類がけっして稀な種類ではないことを示しているといえるであろう。このツノカナブンの色は、やや赤味がかった1♀を除けば、すべて緑色で、よく安定していた。思った通り、大型の1♀

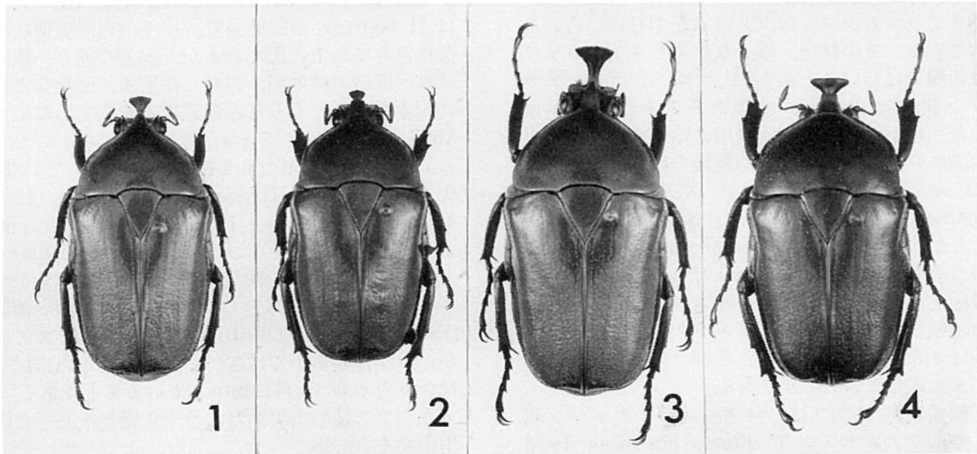


図 1~4. 台湾産ツノカナブン属の2種。1: ヒメツノカナブン♂, 2: 同♀, 3: タイワンツノカナブン♂, 4: 同♀, (いずれも同率に拡大)

Figs. 1~4. Formosan *Trigonophorus* spp. 1: *T. dilutus* Bourgoïn, ♂; 2: do., ♀; 3: *T. varians* Bourgoïn, ♂; 4: do., ♀. (enlarged in the same degree).

を除けば、すべてが小型(頭楯先端の突起を加えた体長22~25mm, 肩幅11~12mm)で細形, 頭楯先端の角状突起は短小で太く, 拡がり弱かった。ただ上述の1♀だけは, 明らかに大型(体長28mm, 肩幅13.5mm)で頑強, 体色は紫藍色で他とは明らかな別種で, 私たちがツノカナブン *Trigonophorus varians* BOURGOIN, 1914 としている, 台湾中部産のものに一致すると思われた。以前から台湾のツノカナブン属は1種だけではなさそうだと考えていた私は, 鬼の首でも取ったように有頂天になり, 今回の種類を勝手に新種であると決め込んで, 種名を *Trigonophorus babai* sp.nov., 和名をヒメツノカナブンとすることにし, 一人ではしゃぎながら寝に就いた。

越えてそれから5日後の9月9日, 今度は六龜郷から再度, 南部横貫公路に入った私は, 関山(Mt. Kuanshan)の北面, 標高約1,200mのあたりで路傍に咲くカラスザンショウを見出した。やはりツノカナブンらしいものが来ているが, 残念ながら高過ぎて私の網では届かない。陳氏の網で掬ってもらい, ヒメツノカナブン5♂♂7♀♀, ツノカナブン1♂1♀, キンヘリハナムグリ *Eucetonia roelofsi prasinata* (BOURGOIN, 1915) 1♂を得た。ヒメツノカナブンは東側の山地ばかりではなく西側の山地にも産することが明らかになった。恐らく南部の標高1,000m内外の山地にかなり広く分布しているであろうと推定される。

さて, 採集した当時は, 台湾から知られているツノカナブンは1種だけと思い込んでいたから, ヒメツノカナブンは新種だとばかり思っていたが, そのうちに, ツノカナブンは同じBOURGOINによって同時に記載されたシノニムが一つあったことを思い出し, それが気になって仕方がなくなって来た。そこで, 9月11日に帰国してすぐ, 酒井香氏の援けを籍りてツノカナブンのシノニムを中心にいろいろ調べてみた。その結果, 残念ながらヒメツノカナブンは新種ではないことが判明したが, 台湾のツノカナブン属には明らかに2種あることが明らかになった。以下はその私の皮算用の結末である。

台湾からツノカナブン属の種類を初めて記録したのは A. BOURGOIN, 1914¹⁾ で, 2新種 *Trigonophorus varians* n. sp. と *T. dilutus* n. sp. を記載したが, 「台湾産の *Trigonophorus* 属の2新種」という表題で台湾産と判るだけで, 詳しい産地や日付の記述は彼の文中には全く見当たらない。しかし, 彼の記載による限り, 私がヒメツノカナブンとした種類は *dilutus* に当り, 私たちがツノカナブンと称して来た種類は *varians* に当る。

三輪勇四郎, 1931²⁾ は, 台湾産のツノカナブン属として, ツノカナブン *T. dilutus* BOURGOIN, 1914 (水社寮), キアシカナブン *T. gracilipes* WESTWOOD, 1845 (関仔嶺), および台湾カナブン *T. varians* BOURGOIN, 1914 (鳳山, 大莆林, 甲仙埔, 祖窟, 集集, 安平, 交力坪) の3種を挙げた。台湾産のツノ

カナブン属の各種に和名が付けられたのも, また各種の詳しい産地が挙げられたのもこれが最初である。

三輪勇四郎, 中条道夫, 1939³⁾ は台湾産のツノカナブン属は, *dilutus* (キンツノカナブン, ツノカナブン) と *varians* (タイワンカナブン, キアシカナブン) の2種だけとし, 1931年に三輪が記録したキアシカナブン *T. gracilipes* WESTWOOD, 1845 (北インド産) は *varians* の誤りであるとした。

この他, 戦前に発行された図鑑類では, ツノカナブンの学名はすべて *T. dilutus* BOURGOIN とされているが, 図示されているものはすべて例外なく *T. varians* BOURGOIN である。ところが, BOURGOIN が台湾内の詳しい産地を記さなかったためか, あるいは日本に齎される標本がすべて *varians* であったためか, 私には判らないが, いつの間にか *dilutus* は *varians* の小型の個体を指しているものと誤られ, *varians* の方が *dilutus* より1頁だけ記載が先行するために, *dilutus* は *varians* のシノニムとされ, 台湾のツノカナブンは1種だけになってしまった。しかし, 正式にこのような取扱いをしたのは, 私の知る限りでは, R. MIKŠIĆ, 1977⁴⁾ が最初で, ごく最近のことである。彼は *varians* BOURGOIN, 1914 を中国産の *T. rothschildi* FAIRMAIRE, 1891 の亜種に降格したうえで, *dilutus* BOURGOIN, 1914 を *varians* BOURGOIN, 1914 のシノニムと認めている。だが, その理由については, “Art beschriebene *T. dilutus* BOURG. ist von *T. varians* nicht zu trennen und mit diesem synonym.” とあるだけで, 具体的な点には触れていない。恐らく *dilutus* は *varians* の小型の個体で, その変異幅の中に含まれてしまうと考えたのであろう。しかし, 両者は, 頭楯突起の形, 体形, 雄交尾器の形などが相異しており, 明らかな別種である。A. BOURGOIN が記載に用いた標本は H. SAUTER の採集品で, バリの自然史博物館に保管されてあると思われるが, 前述の通り, 原記載には台湾内の産地名, 日付, 採集者, 頭数などは一切記述がない。もちろん模式標本の指定もない。R. MIKŠIĆ も *dilutus* を *varians* のシノニムにしているのに両者の syntype を検したとは記していない。また, 彼の検した H. SAUTER の採集品は, 12♂♂11♀♀, 大莆林(v~x. 1910), 1♂3♀♀, 鳳山(ix~x. 1910), 2♂♂5♀♀, 大莆林庄(ix~xi. 1909), 1♂3♀♀, 埔里社(viii. 1908), 4♀♀, 甲仙埔(x. 1908), 1♀, 祖窟(データなし), 2♂♂1♀, 祖窟~蕃薯寮(1912) であるが, この中に模式標本が含まれているかどうかは明らかではない。注目される点は採集日付が8月から11月に集中していることである。ツノカナブン類の出現期はどうやら盛夏を過ぎた頃に集中するらしい。

以上が今日までの台湾産のツノカナブン属についての経過であるが, 台湾産のツノカナブンは2種あり, 私の採集したヒメツノカナブンはどうやら *T. dilutus* BOURGOIN, 1914 に当るらしい。幸いにも,

益本仁雄氏がバリの自然史博物館へ赴かれるとのことなので、*dilutus* と *varians* の模式標本を調べて頂くようお願いした。同氏は多忙の中を早速模式標本を調べて下さり、その結果、ヒメツノカナブンはまさしく *T. dilutus* BOURGOIN, 1914 そのものであり、いわゆるツノカナブンは *T. varians* BOURGOIN, 1914 に相当することが明らかになった。馬場博士には何とも申し訳ない次第であるが、*T. babai* はとうとう陽の目を見ないでしまった。

ヒメツノカナブンの学名についてはこれで問題が片付いたが、次に問題になるのは両種の和名である。三輪, 1931 は *dilutus* の和名をツノカナブンとし、*varians* のそれはタイワンカナブンとし、三輪, 中条, 1939 もそれを踏襲しているが、われわれがツノカナブンと称しているのは *varians* と *dilutus* の両者の総称である。三輪等にしがって *varians* をタイワンカナブンとすると、カナブン属 *Rhomborrhina* の種類とまぎらわしい。従って、*dilutus* の和名をツノカナブンとすると、*varians* をツノカナブンとして来たわれわれの今までの扱いに混乱が生ずる。そこで、この際、ツノカナブンは属名だけに残り、*dilutus* の和名をヒメツノカナブンと改め、*varians* の和名には、一部の人が使っているタイワンツノカナブンをを用いたらどうであろうか。

ヒメツノカナブンもタイワンツノカナブンも通常の個体は共に全体緑色で、野外ではわれわれには両者を識別することは不可能である。花に来ているものでさえ体形や頭樞突起の形で両者を区別することは出来ない。しかし、両者は私の今回の採集例からも混棲していることは間違いない。ただ個体数などから見ると、ヒメツノカナブンの方がタイワンツノカナブンよりも高地に多く、しかもやや遅れて出現するのではないかと推定される。利稻でも関山の北面でも両者は同時に同じ花に来ていた。しかし、タイワンツノカナブンは、利稻では青藍色の1♀、関山の北面では銅色の1♂と青藍色の1♀だけで、緑

色の個体はなく、共に緑色のヒメツノカナブンの中であってもはっきりと識別出来る色彩型ばかりであった。この両者の色彩の相異は、両者が混棲する地域では常にこのような関係にあるのか、たまたま私の採集したタイワンツノカナブンだけが異常色彩のものばかりであったのか、短い観察期間ではどちらも決定することが出来ない。また、タイワンツノカナブンの色彩変異が、羽化直後からそのような色をしていたのか、またはある種のタマムシ類に見られるように、時間的に色彩が変化して、羽化直後の若い個体と生き残りの老いた個体では色彩が異って来るのかのどちらであるかも同様に詳かにすることは出来なかった。もし、後者の例であるならば、両種の間には実に巧妙な、種を識別する機構が存在することになる。もしも再び渡台する機会があるならば、この点を何とか確かめてみたいものである。

最後になってしまったが、今回の渡台にお誘い頂いた馬場金太郎博士、案内して頂いた陳文龍氏、模式標本の検討をお願いした益本仁雄氏、文献についてお世話になり、いろいろご意見を伺った酒井香氏、および標本の撮影をお願いした猪又敏男氏などの諸氏に衷心より御礼を申し上げます。

文 献

- 1) BOURGOIN, A., 1914. Description de deux *Trigonophorus* nouveaux de Formose (Col. Scarabaeidae). *Bull. Soc. ent. Fr.*, 1914: 437~439.
- 2) 三輪勇四郎, 1931. 台湾産昆虫分類目録(鞘翅目), コガネムシ科. 台湾総督府中央研究所農業部報告, 55: 303.
- 3) 三輪勇四郎, 1931. 中條道夫, 1939. 日本産鞘翅目分類目録, 5. 金龜子虫科(台北, 野田書房) 80.
- 4) MIKŠIĆ, R., 1977. Monographie der Cetoniinae der Paläarktischen und Orientalischen Region, *Coleoptera, Lamellicornia*, 2: 346~348.

(東京都世田谷区)

○イネミズゾウムシの或る越冬状況

10年振りにベルレーゼによる採集を再開して驚いた。かつては全く採れなかった、イネミズゾウムシ *Lissorhoptrus oryzae* KUSCHEI がまとまって出るのである。今回は、特にその目的で定量的に調査したのではなく厳密なものではないが、雑木林下の約1平方メートル位の地面の落葉とその下の土を、5mm目のふるいでふるって落ちた土をベルレーゼにかけて得た採集状況は次の通りである。

18♀♀, 新潟県北蒲原郡豊浦町大伝(メッシュ番号5639-62-95), 18. ix. 1990

24♀♀, 新潟県岩船郡関川村鮎谷(カジカダニ) (5639-04-65), 23. ix. 1990

21♀♀, 新発田市倉光(5639-73-33), 2. x. 1990

23♀♀, 新発田市下石川(5639-73-64), 2. x. 1990

この虫は諸橋(1985)によれば、1976年に愛知県常滑市で発見され、調査の結果、付近の水田780ヘクタールでの発生が確認され、翌年には同県内の22市町村4600ヘクタールに拡がり、3年目の1978年には静岡、三重、岐阜に侵入、1982年には関東、東北、四国でも発生が見られるようになったと言う。恐らく当地方への侵入もその頃だったものと思われるが、その点は定かではない。

本種は畦や土手などでも越冬すると言われ、それらの場所での状況は不明であるが、たまたま無作為に採取した山林の落葉下で前記の有様であるから、仮にどこにでも一率に越冬するとなれば、全体では大変な数の成虫が越冬しているものと思われる。しかも単為生殖で1頭が60~100卵を生むとあっては、その増え方は鼠算どころか天文学的数字になるのかも知れない。(新潟県新発田市, 小池 寛)

Gymnopleurus (Paragymnopleurus) stipes japonicus BALTHASAR

について [日本産コガネムシ類に関する考察(2)]

藤岡昌介

考察(1)に続き、日本を基産地とする疑問種について述べてみたい。

この種は BALTHASAR (1955) によって、兵庫県の Mukogama (武庫川?) 付近で採集された標本をもとに記載された種である。その後、彼自身(1963)によって再記載され、日本では林 匡夫(1956)、高橋寿郎(1987)らによって紹介されている。

筆者は日本において、この種はもちろん、同属の種ですら採集されたということを知らない。その為、BALTHASAR などの記載を検討してみた。

この種の基亜種は、SHARP (1875) によってフィリピンから記載された。その特徴は、体は黒色、艶消し、触角は赤褐色、その片状部は黄色、頭楯の前縁は2歯状、前胸の側縁は中央で角張って曲がる、後角は鈍く、突出しない。上翅には細いが明らかな条溝があり、条溝は点刻される、体長は14mm、と簡単に記述されており、*G. maurus* (マレー半島・ボルネオ産)によく似ていると書かれている。

また、JANSSENS (1940) によると *Paragymnopleurus stipes* となっていて、SHARP (1875) よりも詳しく再記載されていて、中脛節の端刺が2つあり、体長は14-16mm、フィリピンのミンドロ島に分布する、などとなっている。なお BOUCOMONT (1914) は *G. maurus* のシノニムとして扱っている。

さて、日本から記載されている *G. (P.) stipes japonicus* の特徴は、原記載によると、原亜種との差異のみが記され、体上面は暗ブロンズ色、上翅の条溝はより細い、間室の顆粒はいくらか粗く平たい、大型(19.5mm)であるとしている。

また、BALTHASAR (1963) によると、原記載のタイプ標本は OBERTHÜR のコレクションでパリ自然史博物館の所蔵、日本亜種は BALTHASAR のコレクションであり、*G. stipes japonicus* は地方型であり、原亜種と同様に稀であり、さらに、それぞれの地域においては、この属の唯一の種であるとしている。

これらの種が含まれる *Paragymnopleurus* については、研究者により、属にされたり、*Gymnopleurus* の亜属にされたり、様々である。その分布域は、東南アジアから北インド・中国(南半部)・台湾などである。ただ、WATERHOUSE (1890) は朝鮮半島から *G. singularis* の記載をしているが、その後の記録は見られない。また、BOUCOMONT (1929, 1931)、STEBNICKA (1980)、KIM (1984) などでも、中国北部・朝鮮半島からの記録はみられない。

このことから、*Paragymnopleurus* は本州に分布する可能性はないとおもわれる。

原記載にもちいられた標本以外に確実な標本もなく、それ以外の報告も一切聞かれていないので、*G. (P.) stipes japonicus* は日本産種から除外するのが

妥当であると思われる。

引用文献

- BALTHASAR, V., 1955, Eine neue Art und Unterart der Gattung *Gymnopleurus* Illig. (Col.). *Mitt. munchn. ent. Ges.*, 44/45: 393-396.
- , 1963, Monographie der Scarabaeidae und Aphodiidae der palaearktischen und orientalischen Region; I. 391 pp. *Tschechosl., Prag.*
- BOUCOMONT, A., 1914, Les Coprophages de l'Archipel Malais (Col.). *Ann. Soc. ent. Fr.*, 83: 238-350.
- , 1929, A list of the Coprophagous coleoptera of China. *Lingnan. Sci.J.*, 7: 759-794.
- , 1931, A list of the Coprophagous coleoptera of China: First Supplement. *Ibid.* 10 (4): 541-543.
- 林 匡夫, 1956, 「玉押しこがね」兵庫県に産す? ねじればね, 1(1): 2.
- JANSSENS, A., 1940, Monographie des Gymnopleurides (Coleoptera Lamellicornia). *Memoires Mus. R. Hist. nat. Belg.*, ser. 2, (18): 3 pp., 2 pls.
- KIM, J. I., 1984, Taxonomic study on the Korean Laparosticti (Scarabaeidae, Insecta) I, Scarabaeidae (1). *Korean J. Ent.*, 14 (19): 51-61.
- SHARP, D., 1875, Descriptions of some new genera and species of the Scarabaeidae from tropical Asia and Malaysia, Part. 1. *Coleopterol. Heft*, XIII: 33-54.
- STEBNICKA, Z., 1980, Scarabaeoidea (Coleoptera) of the Democratic People's Republic of Korea. *Acta Zool. Cracov.*, 24 (5): 191-298.
- 高橋寿郎, 1987, 兵庫・神戸を原産地とする鯉角類について. *サイカク*, (4): 1-8.
- WATERHOUSE, C.O., 1890, Further Descriptions of new Coleoptera of the family Scarabaeidae in the British Museum. *Ann. Mag. nat. Hist.*, ser. 6, Vol. 5: 409-413. (東京都北区)

○ゲンゴロウの「貞操帯」

蝶ではウスバシロチョウやギフチョウが交尾後、♀の腹端に交尾囊をつけることが知られている。しかし「なぜ交尾囊をつけるのか」については明らかではない。交尾囊をつけた♀でも交尾可能だからである。さらに、他の属の蝶はどうして交尾囊をつけないのか?

ゲンゴロウモドキ属(*Dytiscus*)でも上記のような生態がみられる。♂が♀の腹端につける物質は白色で、それほど固くはない。はたして、これが、「貞操帯」として役立つのかどうかについては、まだ観察不十分で判らない。ところが、この「貞操帯」を後脚で上手にはづして「私はまだ処女よ」といった顔で、深夜、泳ぎまわっている♀がいる。

種族維持の観点から考えると、♂の行動と♀のそれとでは、どちらに合理性があるのだろうか?

(東京都大田区, 阿部光典)

西表島から採集されたハネカクシ

柴田 泰利

静岡大学の杉山恵一博士から西表島で採集された多数のハネカクシをいただいた。同島からのハネカクシの記録は極めて少なく、いただいた標本中に本邦から初めて記録される興味深い種もあったので、同定の終了した種類について記録をしておきたい。

なお、筆者の所蔵標本中にも同島を含む琉球諸島から分布記録の無いものもあるので、合わせて記録することにした。採集データ中、採集者名の無いものはすべて杉山恵一博士の採集によるものである。

また、分布地の後の※は同地からは新記録のものである。

1. *Oxytelus puncticeps* KRAATZ カタツノセスジハネカクシ (新称) [日本新記録]

Oxytelus puncticeps KRAATZ, 1859, Arch. Naturgesch. 25(1): 176. [Ceylon].

検視標本: 1♂, 1♀, 古見, 2. viii. 1985.

分布: 日本 (西表島※); 台湾, 東南アジア, アフリカ.

体長 2.2~3.8 mm. 本属の中では小型種のグループに入る。頭部, 胸部, 腹部は黒色で上翅は黄褐色。複眼は比較的小さく, 上翅側縁には縦溝を欠く。左右不对称な雄の頭部と顕著な雄第二性徴 (HAMMOND, 1973-75, Ent. scand. Suppl., 4, figs. 16-17, 18 & 27) などにより他種との識別は容易である。

草食動物の糞, とくに牛糞などから見つかることが多い。

2. *Paederus fuscipes* CURTIS アオバアリガタハネカクシ

検視標本: 1♂, 古見, 2. viii. 1985; 13♂♂, 15♀♀, 住吉, 10. viii. 1985.

分布: 日本 (北海道, 本州, 佐渡島, 伊豆諸島, 隠岐, 四国, 九州, 種子島, 屋久島, 口之永良部島, 奄美大島, 沖縄, 南大東島, 久米島, 石垣島, 西表島); アメリカ大陸を除く全世界。

3. *Lithocharis nigriceps* KRAATZ クロズトガリハネカクシ

検視標本: 1♀, 古見, 2. viii. 1985. 1♂, 1♀, 住吉, 6. viii. 5♂♂, 2♀♀, 住吉, 10. viii. 1985.

分布: 日本 (本州, 佐渡島,

伊豆諸島, 小笠原諸島, 四国, 九州, 対馬, 種子島, 屋久島, 西表島※; 東南アジア。

4. *Phacophallus flavipennis* (KRAATZ) キバネホソナガハネカクシ (新称)

検視標本: 1♂, 1♀, 古見, 2. viii. 1985.

分布: 日本 (九州, 屋久島, 口之永良部島, 沖縄, 西表島※); 台湾, 東南アジア。

5. *Philonthus notabilis* KRAATZ スソアカコガシラハネカクシ

検視標本: 1♂, 6♀♀, 古見, 2. viii. 1985.

分布: 日本 (トカラ宝島, 石垣島, 西表島); 台湾, フィリピン, インド東部。

6. *Philonthus discoideus* GRAVENHORST チビカクコガシラハネカクシ

検視標本: 2♀♀, 古見, 2. viii. 1985.

分布: (本州, 小笠原諸島, 南硫黄島, 種子島, 石垣島, 西表島); 台湾, 世界各地。

7. *Philonthus minutus* BOHEMAN ゴミコガシラハネカクシ

検視標本: 2♂♂, 5♀♀, 古見, 2. viii. 1985.

石垣島の標本があるので, 記録しておく。1♂, パンナ岳, 28. iii. 1984, 吉田篤人採集。

分布: 日本 (本州, 佐渡島, 伊豆諸島, 四国, 石垣島※西表島※); 中国, 南ヨーロッパ, 東南アジア, ニューギニア, アフリカ。

8. *Gabronthus sulcifrons* (SHARP) タテミゾコガシラハネカクシ

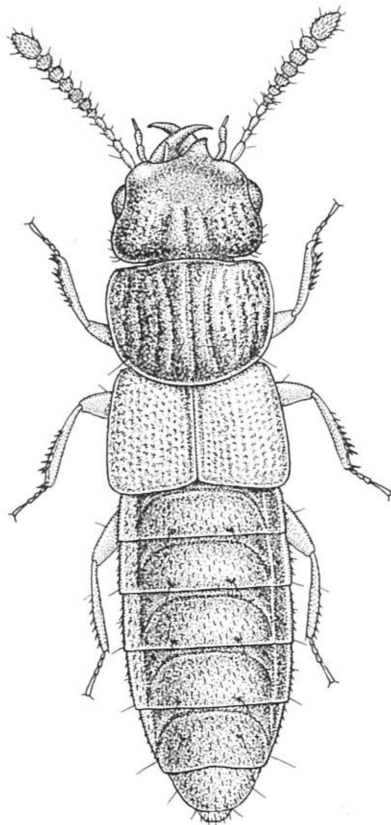
検視標本: 1♂, 1♀, 古見, 2. viii. 1985.

前頭中央から頭頂にかけて明らかな縦溝をそなえる。♂中央片先端は針状にとがり, 腹面中央に側片と向かい合う状態で顕著な縦隆起をもつ。また, 杉山恵一博士採集の標本中に同属の別種と思われる個体があったが2個体とも♀のため種名の決定はできなかった。

分布: 日本 (本州, 九州, 佐渡島, 伊豆諸島, 隠岐島, 対馬, 屋久島, 奄美大島, 西表島※); 台湾。

9. *Cafius (Remus) nauticus* FAIRMAIRE ミナミアバタウミベハネカクシ

検視標本: 40♂♂, 68♀♀,



カタツノセスジハネカクシ *Oxytelus puncticeps* KRDDTZ, ♂, 沖縄県西表島古見産。

南風見, 4. viii. 1985.

分布: 日本(石垣島, 西表島※); 台湾, 東南アジア, ポリネシア, ハワイ, オーストラリア, マダガスカル, モーリシャス諸島, アフリカ東海岸.

10. *Cafius (Remus) rufescens* SHARP アカウミベハネカクシ

検視標本: 41♂♂, 56♀♀, 南風見, 4. viii. 1985.

手許に石垣島で採集された標本があるので記録しておく。3♂♂, 3♀♀, 野底, 7. v. 1989, 吉田篤人採集.

分布: 日本(北海道, 本州, 伊豆諸島, 隠岐, 九州, 種子島, 石垣島※, 西表島※); ホンコン.

11. *Cafius (Bryonomus) corallicola* FAIRMAIRE ムネスジウミベハネカクシ(新称)[日本新記録]

Cafius corallicola FAIRMAIRE, 1849, *Revue Mag. Zool.*, p. 289. [Tahiti].

検視標本: 2♀♀, 南風見, 4. viii. 1985; 3♂♂, 大原, 11. xi. 1971, 田中和夫採集; 1♀, 上原, 29. iv. 1981, 平野幸彦採集.

体長: 3.5~4.5 mm. 体は黒色から暗赤褐色, 触角, 脚はやや赤味を帯びる. 頭部, 胸部は少し光沢があるが, 上翅, 腹部は光沢を欠く.

日本産の本属のものとは, 前胸背板中央の幅広い平滑帯に沿って両側に15, 6個の強い点刻縦列があり, その外側は密に点刻されることで区別できる.

西表島の個体群は台湾産のものより体色がやや暗色で, 前胸背板の点刻はより強いが同種の範囲内と思われる.

台湾からも現在まで分布の記録はないが, 手許に

次の標本がある。12♂♂, 11♀♀, 屏東県鵝鑾鼻, 5. viii. 1970; 4♂♂, 12♀♀, 同上, 13. viii. 1971, 著者採集.

海岸に打ち上げられた海藻やゴミなどの下から発見される.

分布: 日本(西表島※); 台湾※, 東南アジア, タヒチ, ニューカレドニア, オーストラリア, セイシェル諸島, モーリシャス諸島, マダガスカル.

12. *Phucobius densipennis* BERNHAUER リュウキュウウミベアカバハネカクシ

検視標本: 26♂♂, 49♀♀, 南風見, 4. viii. 1985.

石垣島と与那国島からの標本がある。1♀, 石垣島, 12. v. 1970, 水沢清行採集。3♂♂, 3♀♀, 与那国島比川, 6. vi. 1979, 笠原須磨生採集.

分布: 日本(奄美大島, 沖縄, 久米島, 石垣島※, 西表島, 与那国島※).

13. *Cilea silphoides* (LINNÉ) フタテンヒメマルクビハネカクシ

検視標本: 18♂♂, 14♀♀, 古見, 2. viii. 1985.

分布: 日本(本州, 対馬, 屋久島, トカラ中之島, トカラ宝島, 石垣島, 西表島, 波照間島, 与那国島); 世界各地.

末筆ながら貴重な標本をご恵与下さった杉山恵一, 平野幸彦, 笠原須磨生, 水沢清行, 田中和夫, 吉田篤人の諸氏並びに全形図を用意して下さい下さった吉谷昭憲氏に厚くお礼申し上げます.

(東京都町田市)

○ホルンナガタマムシの沖縄本島からの記録

ホルンナガタマムシ (*Agrilus hornianus* KERREMANS, 1913) は, 台湾から採集された標本に基づいて記載された種であるが, 日本では奄美大島^{1), 2)}, 石垣島²⁾, 西表島²⁾, 与那国島²⁾から採集記録がある.

しかし, 日本産タマムシ科概説(11)¹⁾にも記されているとおり, 沖縄諸島からは今まで記録がない.

筆者は, 昨年, 沖縄本島で採集した本種の個体を入手したので記録しておく.

1♀, 沖縄県沖縄島国頭村大國林道福原, 31. v. 1987, 久米寿徳採集

なお, 本個体は, 翅端が丸く分かれており, 鞘翅の前半が明るい緑色, 後半が, 鉄さび色をしている点で, 黒沢良彦博士が1964年に記載した subsp. *shibatai*²⁾に属する. また, 前胸背板は黒色である. なお, 標本を恵与していただいた久米寿徳氏に深謝する.

参考文献

- 1) 黒沢良彦, 1974. 甲虫ニュース Nos. 21, 22, p. 1
- 2) 黒沢, 久松, 佐々治編著, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III), 保育社, p. 26

- 3) Y. KUROSAWA, 1964. DESCRIPTIONS OF SEVERAL NEW SPECIES AND SUBSPECIES OF THE GENUS *AGRILUS* LOO-CHOO ARCHIPELAGO, *Kontyû*, 32 (2): 323-334

(横浜市中央区, 服部宇春)

○南アルプスにおけるカノシマチビゲンゴロウの採集例

カノシマチビゲンゴロウ *Oreodytes kanoi* (KAMIYA) は深山の渓流に生息する稀少種で, 中部地方では, 北アルプス, 奥秩父山系, 妙高山塊から記録がある. 南アルプスでの採集例は未発表とのことなので記録しておきたい.

1♂, 山梨県芦安村広河原, 10. vi. 1990, 筆者採集. 野呂川の淀みで得た. 周囲をさがしたが, 複数の個体は得られなかった.

発表をお勧め下さった阿部光典氏に感謝する.

参考文献

- 阿部光典, 1988. 甲虫ニュース, Nos. 83, 84
(埼玉県浦和市, 鎌倉正人)

Gnorimus otsukae NIIJIMA et MATSUMURA

クロアシナガハナムグリについて

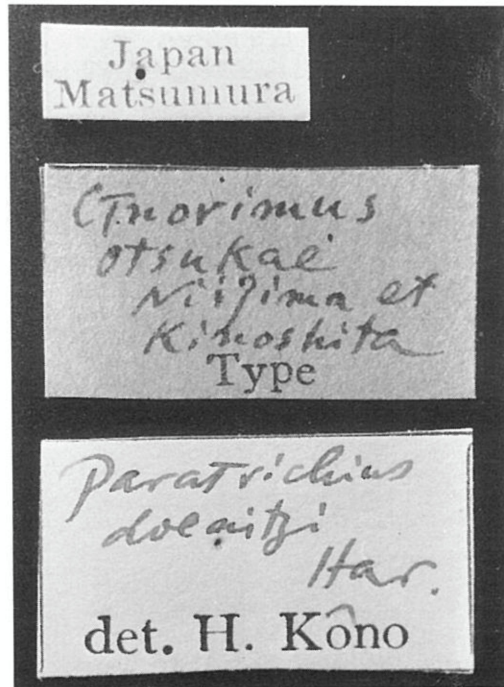
三宅義一

筆者はさきに♂♀の交尾器その他の相異をもとにして、日本本土産のオオトラフコガネは単一の種ではなくて、実はいくつかの種、または亜種を含む種群であるとした。そして九州中、南部のものに *Paratrichiurus kyushuensis* という新名を与え、紀伊半島のものには *P. doenitzi* var. *itoi* TAGAWA を種名に昇格させてこれに当てた。その際指摘しておいたように、日本本土のオオトラフコガネには、更に基産地の *doenitzi* から区別すべきものが含まれていることに言及した。その折にもふれたがオオトラフコガネ *P. doenitzi* (HAROLD) には var. *itoi* TAGAWA のほかにも *Paratrichiurus* の属の模式種である *P. longicornis* JANSON と *Gnorimus otsukae* NIIJIMA et MATSUMURA という異名がある。これらの正体が判明しないと、上に述べたようなタクサの名称が決定できないのである。

P. longicornis のほうは目下タイプ標本の所在を探索中であるが、その産地が Jesso, N. Japan となっているので *doenitzi* そのものか、あるいはこれに近似のものであることは想像に難くない。(この Jesso は北海道のことではないらしい。北海道にはオオトラフコガネは分布しないということである。)ところが、*G. otsukae* のほうは産地が高知、信濃、大台ヶ原となっていて、私の調べたところでは、これらの産地のものはそれぞれ別のグループのものであることがわかっている。つまり、その産地のどれをとって *otsukae* とするかによって種または亜種の名称が大きく変わる可能性を持っているのである。したがってタイプ標本を明らかにし、場合によっては lectotype を指定する必要がある。

そこで新島・木下両博士の研究の本拠であった北海道大学農学部林学教室をはじめ北大関係者に問い合わせしてみたが、その所在は不明であった。考えてみると六十数年も昔に、それも専門外の教室でなされた研究であるので烏有に帰して当然とも思えるのである。ほぼ絶望的になっていたが、最後に望みをかけた長谷川 仁氏、森林総合研究所の野淵 輝博士、同北海道支所の小泉 力氏といった方々のお力ぞえでやっと、数十年間、林試北海道支場に保管されてきた標本が、なんと昨年北大の昆虫学教室に移管されていることが判明した。しかし、問題なのは膨大な標本の中から *G. otsukae* のタイプ標本を検出するという仕事である。ところが幸せなことに同教室の大原昌宏氏がこの面倒な仕事を快く引きうけて下さり、タイプ・シリーズと目される 6 個体の標本の貸与を受けることができた。その標本の内訳は日光中禅寺産の 2 ♀♀ と阿波木屋平産の 1 個体で、これらの採集者はガロアムシなどで有名な E. GALLOIS で、勿論これらは産地が異なるので *otsukae* のタ

イプ標本からは除外すべきものと考えられる。次の 1 ♀ は Kochi, Sugihara となっていて杉原勇三氏の採集品と思われ、産地は *otsukae* と一致するが、日付が 1933 年となっているので、すでに *otsukae* の原記載が出版されたあとで採集された標本ということになる。次の Ohdaigaharayama, Yamamoto, 16. viii. 1913, T. Issiki という一色周知博士の採集品はまさしくタイプ・シリーズの一環を構成していたものと推定される。最後に大原氏が、lectotype を指定するとしたら、この標本が適当ではないかと指示して下さった標本には写真のように、上段の小札の表面に Japan. Matsumura と印刷され、裏面に種小名の由来と考えられる大塚鉄男 (129) とペン書きされている。中段の赤色のラベルには Type と印刷され、*Gnorimus otsukae* Niiijima et Kinoshita



とペン書きされていた。つまり lectotype を指定するまでもなく holotype に相当する標本がちゃんと存在していたのである。ただ興味深いことには、原記載である北大紀要では第 2 著者名が Matsumura であるのに対して Kinoshita と一部変わっていることで、このあたりのいきさつについて私には謎であるが、標本の内容から私たちにいろんな想像をさせるのである。下段には det. H. Kono と河野広道博士の同定ラベルがあり、*Paratrichiurus doenitzi* Har.

と種名がつけられている。つまり、ここで *G. otsukae* が *P. doenitzi* と同物であることを認定したが、少くともタイプ標本によってシノニムを確認した形跡が残っているのである。ところで、この標本に対する私の所見だが、原産地の日光湯元のものとは異なり♀の交尾器中の骨片 (screlite) の腹面は、中央が膨隆することなく強くくぼんでおり、左右の前角は末端が鈍いことなどから、私の調べた範囲では鳥飼兵次氏の採集に係る飛驒 Utsue のものと最も近似している。つまり *otsukae* の原記載の産地の中で信濃を採用すべきであることが判明した。

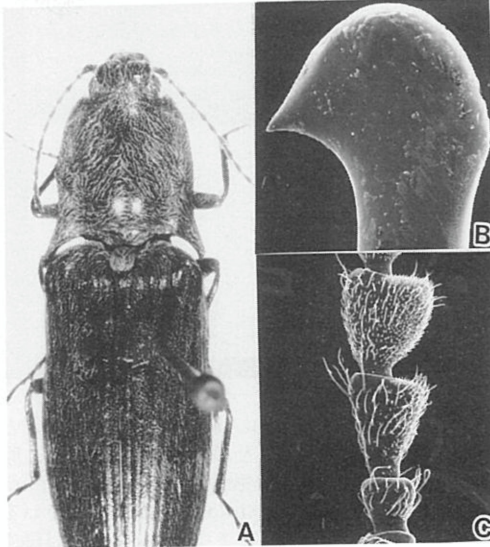
終りに上記の方々に深く感謝したい。

○チシマシモフリコメツキの分布

DOLIN (1987) は千島列島の国後島 (Kunashiri Is.) から *Actenicerus kurilensis* と命名して体長 20 mm 内外の大形のシモフリコメツキの新種を記載した。それは写真 A のような個体で、原記載によれば、本種は *A. orientalis* オオシモフリコメツキによく似ているが、体の色彩、上翅の点刻や條線の構造、触角の形などが相違しているとしている。

筆者の手元には、北海道の石狩地域で小西正泰博士が採集された 1 雄 1 雌個体があるので、これと国後島産のものとして詳しく比較した結果、これら両地域の個体は同種であることが判明した。

北海道産の個体については、岸井 (1980) がオオシモフリコメツキの北海道・青森型として指摘されているが、地域変異であるのか、DOLIN (1987) のよ



A, チシマシモフリコメツキ雄 (体長 19 mm); B, 同, 交尾器の側突起末端部 (背面); C, 同, 触角の第 2~4 節。

引用文献

- HAROLD, E. 1879, Nachtrag zu Stück, Der Beiträge zur Käferfauna von Japan. *Deutsch. ent. Zeit.*, 23, Heft. 2: 366.
- JANSON, O. 1881, Notices of new or little known Ceti-niidae. *Cist. Ent.* 2: 609-611, pl. 2.
- 三宅義一, 1990, 1 種ではなかったオオトラフコガネ, 北九州の昆虫, 37 (1), pl. 4.
- 新島善直・木下栄次郎, 1923, こがねむしに関する研究報告 2, 北海道帝国大学農学部演習林研究報告 2 (2): 190-191, 236-237, pl. 6, Fig. 4.
- 田川 宏, 1939, *Paratrichiis doenitzi* HAROLD var. *itoi* TAGAWA について, 九州昆虫同好会誌, 2 (2): 15-16. (東京都多摩市)

うに独立種であるのか、今後、より詳しい比較検討が必要と思われる。本州に産する種と最も顕著な差は、触角は短く、第 3 節が、より三角形をしており (写真 C)、第 4~6 節あたりも、より顕著に三角形をしている。体色は暗銅色の光沢を有する。雄交尾器の外突起の末端部の形状は写真 B のようになっているが、これは多くの個体を検しないと変異があるのではない。また、青森県のは北海道のと同じ型であるかについてもさらに検討が必要と思われる。

引用文献

- DOLIN, V. G. (1987), New species of the Elaterid Beetles (Coleoptera, Elateridae) from the Far East. *Rev. d'Ent. l'USSR*, LXVI (2): 345-350. (原文はロシア語)
- 岸井 尚 (1980), 日本産シモフリコメツキの研究 (2). *Bull. Heian High School*, (24): 1-7, 9pls. (岡崎市舞木町, 大平仁夫)

○コアトワアオゴミムシを栃木県足利市で採集

コアトワアオゴミムシ *Chlaenius hamifer* CHAUDOIR を足利市で得ているので報告する。

1♂, 栃木県足利市福富町, 29. vii. 1990, 大川秀雄採集

採集地は芝を敷きつめたグラウンドで、元々は水田だったところである。恐らく筆者の知るかぎりこれまでの北限記録ではないかと思われる。

既に足利市からは大川・佐藤 (1990, 栃木県立博物館研究紀要, 7: 7-41), 大川 (1990, インセクト, 41 (1): 56) により 212 種のゴミムシが知られており今回記録された本種とヤマトトクリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* BATES も記録され 214 種となったので併せて報告する。

ヤマトトクリゴミムシ: 1♂, 栃木県足利市利保町, 6. vii. 1990, 大川秀雄採集 (栃木県足利市, 大川秀雄)

長野県十字山山のゴミムシ類

笠原 須磨生

十字山(標高2,072 m)は、長野・埼玉両県の境界につらなる奥秩父山嶺中の一峯である。南の鞍部には、古来、信州から武州への捷路として往来の盛んであった十字峠があり、コメツガの密林をゆく静かな峠道は今も多くの人々に愛されている。

1985年の夏、阿部光典氏は長野県川上村の梓山からモウキ平を経て十字山に登り、多数の甲虫類を採集された。以下に列記する25種のゴミムシ類は、その折の成果の中から筆者に恵与され、同定と記録の公表を託されたものである。奥秩父山地のゴミムシ類に関する報文は少なく、阿部氏の採集品は分布資料としても貴重なものと考えるので、ここに発表して氏のご好意に報いたい。

各種のデータは、すべて「長野県川上村十字山、9~11. viii. 1985, 阿部光典採集」として省略し、主としてトラップによる採集地点の海拔標高のみ個別に括弧内に記した。ただし、標高2,000 m地点は、正しくは埼玉県大滝村の地区内となる由。

1. *Leistus niger arecto* BATES キノカワゴミムシ: 3♂♂, 1♀ (1,600 m).

2. *Leistus subaeneus* BATES アオキノカワゴミムシ: 2♂♂, 1♀ (2,000 m).

3. *Nebria ochotica* R. F. SAHLBERG クロマルクビゴミムシ: 11♂♂, 6♀♀ (1,400 m).

4. *Nebria sadona* BATES サドマルクビゴミムシ: 2♀♀ (1,600 m).

5. *Trechiana lewisi* (JEANNEL) オンタケナガチビゴミムシ: 1♂ (2,000 m).

6. *Bembidion nuncaestimatum* NETOLITZKY オオヨツアナミズギワゴミムシ: 3♂♂, 3♀♀ (1,400 m).

7. *Bembidion tetraporum* BATES ヨツアナミズギワゴミムシ: 2♂♂, 1♀ (1,400 m).

8. *Trigonognatha aurescens* BATES キンイロオオゴミムシ: 4♂♂, 3♀♀ (1,400 m); 7♂♂, 10♀♀ (1,600 m); 19♂♂, 20♀♀ (2,000 m).

9. *Pterostichus karasawai* TANAKA ミヤマクロナガゴミムシ: 3♂♂, 2♀♀ (1,400 m); 3♂♂, 11♀♀ (1,600 m).

10. *Pterostichus leptis* BATES クロオオナガゴミムシ: 2♂♂, 1♀ (1,400 m).

11. *Pterostichus oblongopunctatus honshuensis* HABA et BABA ホシナガゴミムシ: 1♂ (2,000 m).

12. *Pterostichus mucronatus* STRANEO ヤツオオナガゴミムシ: 1♀ (1,400 m); 3♂♂, 4♀♀ (1,600 m); 2♀♀ (2,000 m).

13. *Pterostichus spiculifer yatsuensis* STRANEO ハラトゲナガゴミムシ亜種: 3♂♂, 5♀♀ (1,400 m); 6♂♂, 8♀♀ (1,600 m). 前胸背板と雄の腹部腹板末端節の形態により、八ヶ岳を基産地とする本亜種に同定される。

14. *Pterostichus asymmetricus* BATES ミズギワナガゴミムシ: 6♂♂, 13♀♀ (1,600 m); 1♀ (2,000 m). 本種は地域変異が多いことではよく知られているが、十字山の個体群は、複眼後方(こめかみ)のふくらみが弱く、雄腹端節の突起は先端が強くとがる。陰茎の先端片は、少し広がる。

15. *Pterostichus brunneipennis* STRANEO ハネアカナガゴミムシ: 4♂♂, 41♀♀ (1,600 m); 28♂♂, 36♀♀ (2,000 m). 大部分が黒翅型の f. *nigripennis* TANAKA で、上翅が赤褐色もしくは褐色をおびる基準型は少なく、全個体の約7%にすぎない。亜高山針葉樹林における優占種で、基産地の八ヶ岳でも標高2,000 m 付近から個体数が急増する。

16. *Pterostichus katashinensis naganoensis* TANAKA カタシナナガゴミムシ亜種: 1♂, 7♀♀ (1,600 m); 12♂♂, 22♀♀ (2,000 m). 背面がよく隆まり、本亜種と同定されるが、基産地である八ヶ岳の個体群とはやや体型がことなり、上翅の短かい個体もみられ、興味深い。

17. *Colpodes xestus* (BATES) ツヤモリヒラタゴミムシ: 2♀♀ (1,400 m); 1♂, 8♀♀ (1,600 m); 8♂♂, 17♀♀ (2,000 m). 山地帯から亜高山帯にかけての林床に、きわめて多い種で、十字山でも高所ほどトラップによる捕獲数が増えている。

18. *Pristosia aeneola* (BATES) ホソヒラタゴミムシ: 2♂♂, 4♀♀ (1,600 m).

19. *Synuchus cycloclerus* (BATES) クロツヤヒラタゴミムシ: 2♀♀ (1,400 m).

20. *Synuchus melantho* (BATES) コクロツヤヒラタゴミムシ: 2♂♂, 3♀♀ (1,400 m); 1♂, 1♀ (1,600 m).

21. *Synuchus calliteres* (BATES) キアシツヤヒラタゴミムシ: 2♂♂, 2♀♀ (1,400 m).

22. *Synuchus takeuchii* (HABU) タケウチツヤヒラタゴミムシ: 1♂, 2♀♀ (1,600 m).

23. *Synuchus atricolor* (BATES) ホソツヤヒラタゴミムシ: 2♀♀ (1,600 m).

24. *Trichotichnus congruus* (MOTSCHULSKY) ヒメツヤゴモクムシ: 2♀♀ (1,400 m).

25. *Trichotichnus* sp. ツヤゴモクムシの1種: 1♂, 1♀ (1,600 m). *T. leptopus* (BATES) によく似ているが、肢が暗色で、陰茎内袋の骨片はクサビ型の大きなものではなく、先の丸い小さな骨片である。異常型か、あるいは、この地域に特有の個体群に属するものか、標本を集めて調べてみたい。

末尾ではあるが、興味深い標本を調査する機会を与えて下さった阿部光典氏に厚く御礼申し上げる。

(千葉県船橋市)

○九州産ミヤマオオハナムグリについて

ミヤマオオハナムグリ *Protaetia lugubris insperata* (LEWIS) は従来、日本全土に分布するとされていたが、黒澤 (1985) は西日本産の本種については、すべてムラサキツヤハナムグリ *P. cataphracta* ARROW であるとした。

筆者は大分県黒岳山麓 (標高 1000 m 付近) においてミヤマオオハナムグリと同定される種を採集しているの、九州からの記録として報告しておく。

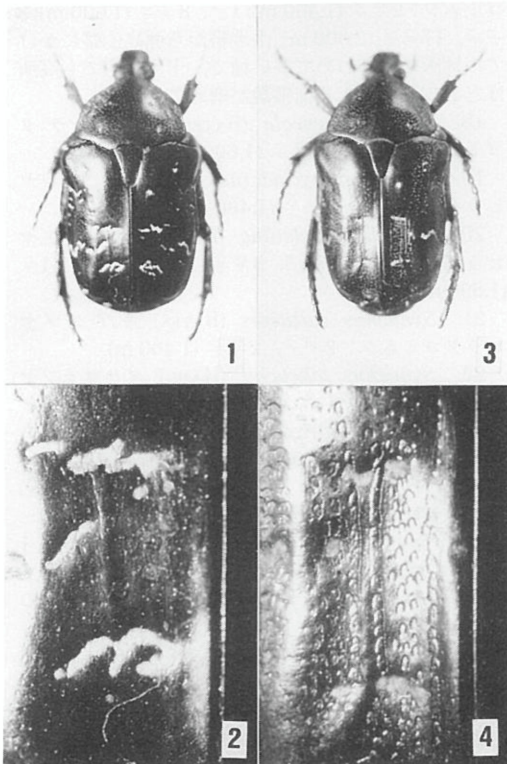
1♀, 大分県黒岳, 11. vi. 1988, 城戸克弥採集・保管

この個体は黒岳山麓の原生林内において、ブナの立ち枯れ上を歩行していたものである。比較のための九州産ムラサキツヤハナムグリ (♂, 福岡県宗像市城山, 標高 300 m 付近, 28. vii. 1977, 城戸克弥採集・保管) と共にここに写真を示す。

なお、足立 (1989) の九州産ムラサキツヤハナムグリ (♀) の報告を始め、これら両種の九州からの報告については再検討されるべきであると考え。

末筆ながら、写真を見ていただき御教示下さった黒澤良彦先生に心よりお礼申しあげる。

(福岡県大野城市, 城戸克弥)



1, 2...ミヤマオオハナムグリ (大分県黒岩産) 3, 4...ムラサキツヤハナムグリ (福岡県城山産) 2, 4 は左上翅中央紋と後方紋の会合線付近

○ナカグロキバネクビナガゴミシ多摩川に多産

比較的記録の少ないナカグロキバネクビナガゴミシ *Odacantha puziloi* SOLSKY が多摩川下流に多産することが判明したので、若干の生態的知見をそえて報告する。採集場所はいずれも東京都大田区東六郷で、六郷橋緑地付近のアシ原である。なお本種は、筆者らの知るかぎりでは東京都初記録と思われる。

1♀, 7. v. 1990, 中山不羈採集; 2♂♂1♀, 13. v. 1990, 和泉敦夫採集; 3♂♂1♀, 17. v. 1990, 和泉採集; 1♂3♀, 18. v. 1990, 和泉採集; 2♂♂1♀, 19. v. 1990, 和泉採集; 7♂♂8♀, 20. v. 1990, 和泉採集; 27♂♂8♀, 20. v. 1990, 中山採集; 10♂♂2♀, 22. v. 1990, 和泉採集; 7♂♂2♀, 24. v. 1990, 和泉採集; 10♂♂4♀, 25. v. 1990, 中山採集; 4♂♂5♀, 27. v. 1990, 和泉採集

同属のチャバネクビナガゴミシはアシなどの葉にのぼることが知られている*が、本種の場合も同様で、湿った地面に枯アシが散乱している様な場所に多く、このばあい地面や生きているアシよりもむしろ、先が折れて斜めに空間に突き出した枯アシの茎などで見出されることが多かった。(但し余り歩き廻って探すよりも、一箇所待っている方が見つかる率が高い様である。) 和泉の観察によると、本種は早朝5時半頃にはすでに活動が認められた。夜間の生態については未確認である。(暑い日盛りに草いきれの中でひたすら枯アシを見つめて待つのはかなりの忍耐力を要するので、採集は朝の方が楽かも知れない。) 和泉が5月20日にチャバネクビナガを1頭採集した以外、同地で得られたのはすべてナカグロキバネクビナガであり、ここではチャバネよりもナカグロキバネの方が普通種の感が強い。

本種は付近に人間が近づいた時の振動を敏感に感知して、隠れ家から姿を現わす場合が多い様に感じられ、わざわざ人目につきやすい茎に出て来て、まるで採集者を見物するかの様に静止していることもよくあるので、案外好奇心(?)の強い虫なのかも知れない。そのせいか、小一時間静観しても仲々姿を現わさぬぐせに、1頭とれるとその時の振動が伝わったためか、すぐ近くから、うその様に何頭も現われて追加採集できる場合が多かった。

中山が10頭(5月25日採集したもの)を飼育した観察では、歩くばかりで飛ぶのは見たことがない。また、土の上に置いた枯アシ(適当に折ったもの)の中空部によく潜り込む習性があることが確認され、その動作はカニが穴に出入りする時の様に非常にスムーズで、如何にも平常のなれた動作という感じである。息を吹きかけると、あちこちの茎の穴から一斉に出て来るのが認められた。

自然状態でも枯アシの茎の中空部に潜む可能性はかなり高いものと思われ、細長い体型もそのためへの適応と考えると納得がいく。(余談になるが、採取した枯アシから後刻、ミズギワアトキリゴミシが出て来たので、この虫やはり体型は細長い一も中

空部に潜む習性があると考えられる。)中空部に潜む理由としては、外敵や寒さからの護身(?), 昆虫, ダニ, 菌類などの摂食(?), 産卵(?), 洪水時の救命ボート用(?), などが一応考えられるが突き止めてはいない。

水滴や砂糖水を吸い、与えれば魚肉、かまぼこ、鳥肉、豚肉を食べるのも観察したが、ミミズの新鮮な死体(小片)は見たかぎりでは食べなかった。交尾も観察し2週間後に、破裂せんばかりにふくらんだ♀の腹が、更に2週間後には小さくなっていたので産卵したものと考えられるが、産卵状況は残念ながら観察できなかった。7月12日現在2♂は死亡し、残りはなお継続して飼育の予定である。

参考文献

- * 河田党, 加藤静夫共編(1962)新原色昆虫図鑑, 87 p.
(東京都大田区, 中山不羈: 同区, 和泉敦夫)

◇ 例会報告 ◇

日本鞘翅学会 1990年9月例会を、9月2日(日)午後1:30より、上野・国立科学博物館4階の実験講義室でおこないました。会務報告に次ぎ、講演は岩田隆太郎氏(日大農獣医、林学科)による「日本産シナノクロフカミキリ属のキクスイモドキカミキリ種群について」。スライド投影をまじえて分類と分布に関する知見の現状が解説され、質疑応答のうち、盛大な拍手がおくられて約1時間の話が終了。休憩後は標本の回覧や交換、懇談を楽しみ、なごやかな雰囲気のうち午後5:00閉会いたしました。

参加者は32名。恒例の二次会的茶話会は、いつも立ち寄り上野公園内のパーラーが休業。なお散じがたき有志十数名は上野駅近くの酒亭に席をもうけ、さらなる虫談に時を忘れたことでした。

笠原須磨生(例会担当)

◇ 会員動静 ◇

◇ 木曜談話会 (通称、木曜サロン) のお知らせ ◇

木曜サロンは、名前の通り毎週木曜日午後 8 時頃から 10 時半頃まで開かれている。正月の 1~2 週間または木曜日が祝祭日である場合をのぞいては、台風や大雪の日でも必ず何人かは集まっている。

1959 年 (昭和 34 年) 以来 30 年間も休みなく続いているが、1988 年からは、鞘翅学会の正式な会合として認知された。

場所は東京・上野駅から 5~6 分の所で、会員の福田惣一氏のご好意により、ビルの 1 フロアを使わせていただいている。午後 8 時頃から 10 時半頃まで、何時に来て何時に帰ってもよく、もちろん来ても来なくても自由なのだ。

ビニキュラーが備えられていて、甲虫図鑑やカミキリ大図鑑も置いてあるので、虫の同定にも不便はない。何といても最新の採集情報が得られるし、毎週いろいろな甲虫を見られるのがうれしい。

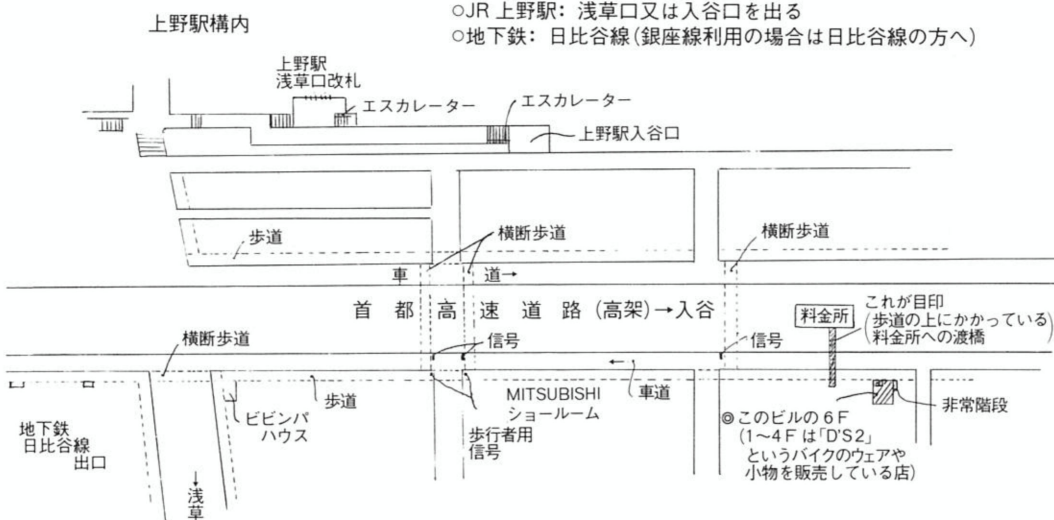
まだ来たことのない方は、何はともあれ、一度顔を出してみてください。

住所: 〒110 台東区東上野 4-26-8 7 階建ビル 6 階 (1 階は「D'S2」というバイクの衣類やバッグなどを売っている店)

電話: 03 (841) 4878

露木繁雄 (談話会担当)

- JR 上野駅: 浅草口又は入谷口を出る
- 地下鉄: 日比谷線 (銀座線利用の場合は日比谷線の方へ)



◇ 夏は虫を、冬はペンを、とりましょう ◇

雨が少なく、暑い夏でしたが、成果はいかかでしたか?美しく仕上がった標本をじっと眺めているうちに「あれっ、なんだ、こいつは」と気付いたことはありませんか?すぐペンを執って下さい。

投稿を待っております。

143 大田区南馬込 1-38-6, Tel. 03-771-1065

阿部光典 (編集担当)

日本鞘翅学会

会費 (一ケ年) 5000 円, 次号は 1991 年 3 月下旬発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館昆虫第 1 研究室

電話 (364) 2311, 振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷 1 丁目 7-6

振替 東京 (3) 21129

電話 (03) 409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥6,200, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,870, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3 個以下 ¥1,300, 4 個以上 ¥850 (以下同様), 第 2 地帯 ¥1,500, ¥950, 第 3 地帯 ¥1,700, ¥1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547, 振替 6-113479